

---

## 妖幻抄 3章

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖幻抄 3章

### 【Nコード】

N0854A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

氷雨は、明を何とか慣らそうとして、試行錯誤する。しかし、なかなかうまくいかず…？

### 3章 絆

「明　っ、こっちだこっち！これ見ろっ」

「なんだ、氷雨：そんなにやかましく呼ばなくても、ちゃんと聞いているぞ」

明は、うざったそうに、顔を顰<sup>しか</sup>めた。

氷雨は、小枝を、片手で振り回して明を呼んだ。

「なんだ、なにするんだ？」

ちなみに、二人の間は、一メートルほど離れている。

「これ、取ってこい、ほらっ！」

これ、とは、小枝のことである。氷雨は、小枝を投げた。

しかし、投げられた小枝はやる気なく、氷雨と明の中間に落下した。風が、砂埃を吹いていく。二人の間に、いくらかの静寂が流れた。

「どうした、早く持ってこいよ…」

言いかけた氷雨は、突然よろける。

明が、投げつけた枝が、氷雨の顔面を直撃したからである。

「バカにするなっ！？そんなモン、自分で取ってこいっ」

怒鳴る明。

「つてて、怒るなつて…俺は、スキンシップと思ってだな…」

「帰る！」勢いよく、まわれ右をした明を、氷雨は慌てて引き寄せた。

「あー…ほら、怒るなつて、な？そうだ！おやつやるよっ、<sup>からたち</sup>枸橘だ。好きだろ？これ」

「……」

枸橘：ミカンを渡された明は、しばらく静かになった。

（なんとか、機嫌なおしてくれたのかなあ？）

「明？明ちゃ～ん？機嫌なおったのか？」

「氷雨、これ…まだ青いぞ、食えない。返す…あと、その呼び方やめてくれ、鳥肌が立った」

様子を、伺うつもりで話しかけた氷雨だが、さらに、墓穴を掘ってしまったようだ。

「くだらない、帰るぞ」

「ああつ、こら明！」

「なんだっ！」

なんとか、明を引き留めようとする氷雨。

しかし、振りむいた明は、眉間にしわを寄せ、不機嫌モード全開である。

「な、なんでもないっス…」

「ふん…帰るぞ」

すたすた、と先を行く明。

一方、氷雨は頭を抱え、苦悩していた。

（強えっ！こいつ、なにげに強くなってるねえか！？）

主従逆転の、危機である…

### 3章 絆（後書き）

この作品の感想をお寄せください。  
今後の参考にします。

### 3章 恋心（前書き）

次第次第に、絆深まる二人。

氷雨に黙って村をでてきた明。

それに気づいた氷雨は、無事に彼女を見つけることができるのか！  
？

### 3章 恋心

氷雨と明は、奮闘を続けた。

傷だらけ、泥だらけ。しかし、日を追う毎に、固かった明の表情も和らぎ、今となつては、氷雨だけに笑顔を見せるようになった。

そんなことが続いた、朝。氷雨が目を覚ますと、いつもは側に座っている明が、どこにも見当たらなかった。

「ん…明、明　どこいった、出てこいよ」

小屋の中を、氷雨は見回す。

（つかしいな、一人で外行つたのか？あいつめ…）

氷雨は、走り出していた。

思い浮かぶだけの、いやな予感が、頭をよぎる。

いつもの散歩道を走り抜け、大声で、明を呼んだ。

「他のやつらに喰われてたら、どうしよう！？明っ、返事しろ

！」

しかし、返事は、ない。木々のざわめきが、声をかき消してしまう。

その頃、明は、動けずにいた。

片足の、自由がきかないのだ。以前の切り傷が化膿し、痛みを放っている。

「捜すな、捜さないでくれっ、氷雨」

明は、恐れていた。動けなくなった自分を、周りは、どうするだろうか？

きっと、他の人間と同じに、喰われるだろう。

そんなことを考えると、なぜか、涙がこぼれた。

（迷惑なんて、かけるつもりはないっ…だから、だからここで、死ぬ！殺されるなら、氷雨に、殺されたかったけど。あたし、ヘンなこと考えるようになったな）

起き上がり、片足を引きずりながら、明は歩き出した。

涙が、止まらなかった。

氷雨は、半狂乱になっていた。

不安なのだ！明が、そばにいないと。

「明！返事してくれ　　っ、明うう！！」

（どうしたんだ！なんで、いなくなった！？）

明は、耳を塞いで、血が滲むほど唇をかみしめ、歩き続けた。

（だめなんだ、あたしは、傍にいられないっ）

「…あうっ！」

走りたくても、片足が利かず、それでも、走り出そうとした彼女は、地面に倒れ込んでしまった。

遠くに、自分を捜す、氷雨の声が聞こえる。

（見つけて、見つけてくれっ！、お願いだ、氷雨っ！）

「ひ、さめ…氷雨え　　！ここだっ、ここにっ…アウっ！？」

明は、走った痛み、悲鳴を上げた。

「明ッ！？」

氷雨は、かすかな声を聞き、立ち止まる。

「明っ、どこだっ！どこにいるっ！？」

「早く来て、あたしはここだ…見つけて、氷雨っ！」

氷雨は、走り出した。

思い浮かぶのは、気の強い彼女の、怒り顔。

けれど、それを失いたくない、と氷雨は、強く願うようになっていた。

「明っ！大丈夫だっ、今俺が行ってやる！待ってるっ」

早瀬を渡り、倒木を飛びこえ、明の気配を辿りながら、氷雨は、ひたすら走った。

「氷雨、一人にしないで…氷雨っ」

明は、涙を拭って、周りを見まわす。しかし、彼の気配は感じられなかった。



「あたしの声なんか、聞こえないんだな…ここで、死ぬのか」  
腫れて、膿んだ傷が痛んだ。

今までにも、似たような傷を、作ったことはあったはずなのに、それなのに、痛かった。

歩くたびに、血が滲み、血だまりを作った。

明は、あぐら蹲る。

もう、余計な動きは、したくないからだ。

気が、遠くなっていくような気がする…

(動けない…あたし、もう、終わりなんだな)

目を、閉じようとした瞬間、抱き上げられ、明は、目を見開いた。

「明ッ、明！しっかりしろっ、明！」

「ひ…さめ、氷雨えっ！」

明は、氷雨の首に抱きつく。

「どうして、勝手にいなくなっただ！？死ぬほど心配したんだぞっ」

「ごめん…ごめんっ！迷惑、かけたくなかった、怖かったっ」

「迷惑なもんかよ！そんな傷で、どうする気だったんだっ」

「動けなくなったら、喰われるのかと思った、喰わないでっ、殺さ

ないでくれ！」

氷雨の衣を掴み、必死に懇願する明。

「安心しろっ、誰にも喰わせねえから。俺が、守ってやる」

「よかった…よかったあ」

「それと…」

明は、またも目を見開く。

氷雨が、明の唇を奪っていた。

「氷雨っ！？」

「おっと！」

頬を、殴ろうとした明の手を、氷雨は掴む。

「怒ったのか？前は、お前からしてきたのに」

「そっ、そんなこと、どうだっていい…驚いたんだっ」

怒鳴る明の顔は、赤い。

「イヤ、じゃなかったんだな？ふーん」

「ちっ、ちがう！そうじゃないっ」

「まー…とりあえず、戻んぞ。少し進展、っと」

「は？」

「いや、なーんでもねえ。ほれ、おぶされ」

「う、うん…」

### 3章 恋心（後書き）

ぜひ、この作品の感想をお寄せください。  
今後の参考にいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0854a/>

---

妖幻抄 3章

2010年10月9日07時06分発行